一夕話

芥川龍之介

「何しろこの頃（ごろ）は油断がならない。和田（わだ）さえ芸者を知っているんだから。」

藤井（ふじい）と云う弁護士は、老酒（ラオチュ）の盃（さかずき）を干（ほ）してから、大仰（おおぎょう）に一同の顔を見まわした。円卓（テエブル）のまわりを囲んでいるのは同じ学校の寄宿舎にいた、我々六人の中年者（ちゅうねんもの）である。場所は日比谷（ひびや）の陶陶亭（とうとうてい）の二階、時は六月のある雨の夜、——勿論（もちろん）藤井のこういったのは、もうそろそろ我々の顔にも、酔色（すいしょく）の見え出した時分である。

「僕はそいつを見せつけられた時には、実際今昔（こんじゃく）の感に堪えなかったね。——」

藤井は面白そうに弁じ続けた。
「医科の和田といった日には、柔道の選手で、賄征伐の大将で、リヴィングストンの崇拝家で、寒中一重物で通した男で、——一言にいえば豪傑だったじゃないか？　それが君、芸者を知っているんだ。しかも柳橋の小えんという、——」
「君はこの頃河岸を変えたのかい？」
突然横槍を入れたのは、飯沼という銀行の支店長だった。
「河岸を変えた？　なぜ？」
「君がつれて行った時なんだろう、和田がその芸者に

遇ったというのは？」

「早まっちゃいけない。誰が和田なんぞをつれて行くもんか。――」

藤井は昂然と眉を挙げた。

「あれは先月の幾日だったかな？　何でも月曜か火曜だったがね。久しぶりに和田と顔を合せると、浅草へ行こうというじゃないか？　浅草はあんまりぞっとしないが、親愛なる旧友のいう事だから、僕も素直に賛成してさ。真っ昼間六区へ出かけたんだ。――」

「すると活動写真の中にでもい合せたのか？」

今度はわたしが先くぐりをした。

「活動写真ならばまだ好(い)いが、メリイ・ゴオ・ラウンドと来ているんだ。おまけに二人とも木馬の上へ、ちゃんと跨(またが)っていたんだからな。今考えても莫迦莫迦(ばかばか)しい次第さ。しかしそれも僕の発議(ほつぎ)じゃない。あんまり和田が乗りたがるから、おつき合いにちょいと乗って見たんだ。――だがあいつは楽じゃないぜ。野口(のぐち)のような胃弱は乗らないが好(い)い。」

「子供じゃあるまいし。木馬になんぞ乗るやつがあるもんか？」

　野口という大学教授は、青黒い松花(スンホア)を頬張ったなり、蔑(さげす)むような笑い方をした。が、藤井は無頓着(むとんじゃく)に、時々

和田へ目をやっては、得々（とくとく）と話を続けて行った。
「和田の乗ったのは白い木馬、僕の乗ったのは赤い木馬なんだが、楽隊と一しょにまわり出された時には、どうなる事かと思ったね。尻は躍るし、目はまわるし、振り落されないだけが見っけものなんだ。が、その中でも目についたのは、欄干（らんかん）の外（そと）の見物の間に、芸者らしい女が交（まじ）っている。色の蒼白い、目の沾（うる）んだ、どこか妙な憂鬱な、——」
「それだけわかっていれば大丈夫だ。目がまわったも怪しいもんだぜ。」
飯沼はもう一度口を挟んだ。

「だからその中でもといっているじゃないか？　髪は勿論銀杏返し、なりは薄青い縞のセルに、何か更紗の帯だったかと思う、とにかく花柳小説の挿絵のような、楚々たる女が立っているんだ。するとその女が、――どうしたと思う？　僕の顔をちらりと見るなり、正に嫣然と一笑したんだ。おやと思ったが間に合わない。こっちは木馬に乗っているんだから、たちまち女の前は通りすぎてしまう。誰だったかなと思う時には、もうわが赤い木馬の前へ、楽隊の連中が現れている。――
――」

我々は皆笑い出した。

「二度目もやはり同じ事さ。また女がにっこりする。と思うと見えなくなる。跡(あと)はただ前後左右に、木馬が跳(は)ねたり、馬車が躍ったり、然(しか)らずんば喇叭(らっぱ)がぶかぶかいったり、太鼓(たいこ)がどんどん鳴っているだけなんだ。――僕はつらつらそう思ったね。これは人生の象徴だ。我々は皆同じように実生活の木馬に乗せられているから、時たま『幸福』にめぐり遇っても、摑(つか)まえない内にすれ違ってしまう。もし『幸福』を摑まえる気ならば、一思いに木馬を飛び下りるが好(よ)い。――」

「まさかほんとうに飛び下りはしまいな？」

からかうようにこういったのは、木村という電気会

社の技師長だった。
「冗談(じょうだん)いっちゃいけない。哲学は哲学、人生は人生さ。――所がそんな事を考えている内に、三度目になったと思い給え。その時ふと気がついて見ると、――これには僕も驚いたね。あの女が笑顔(えがお)を見せていたのは、残念ながら僕にじゃない。賄征伐(まかないせいばつ)の大将、リヴィングストンの崇拝家、ETC. ETC. ……ドクタア和田長平(わだりょうへい)にだったんだ。」
「しかしまあ哲学通りに、飛び下りなかっただけ仕合せだったよ。」
無口な野口も冗談をいった。しかし藤井は相不変(あいかわらず)話

を続けるのに熱中していた。

「和田のやつも女の前へ来ると、きっと嬉しそうに御時宜(おじぎ)をしている。それがまたこう及び腰に、白い木馬に跨(またが)ったまま、ネクタイだけ前へぶらさげてね。——」

「噓をつけ。」

和田もとうとう沈黙を破った。彼はさっきから苦笑(くしょう)をしては、老酒(ラオチュ)ばかりひっかけていたのである。

「何、噓なんぞつくもんか。——が、その時はまだ好(い)いんだ。いよいよメリイ・ゴオ・ラウンドを出たとなると、和田は僕も忘れたように、女とばかりしゃべっ

ているじゃないか？　女も先生先生といっている。埋(う)まらない役まわりは僕一人さ。――」

「なるほど、これは珍談だな。――おい、君、こうなればもう今夜の会費は、そっくり君に持って貰(もら)うぜ。」

飯沼は大きい魚翅(イウツウ)の鉢へ、銀の匙(さじ)を突きこみながら、隣にいる和田をふり返った。

「莫迦(ばか)な。あの女は友だちの囲いものなんだ。」

和田は両肘(りょうひじ)をついたまま、ぶっきらぼうにいい放った。彼の顔は見渡した所、一座の誰よりも日に焼けている。目鼻立ちも甚だ都会じみていない。その上五分刈(ごぶが)りに刈りこんだ頭は、ほとんど岩石のように丈

夫そうである。彼は昔ある対校試合に、左の臂(ひじ)を挫(くじ)きながら、五人までも敵を投げた事があった。——そういう往年の豪傑(ごうけつ)ぶりは、黒い背広(せびろ)に縞のズボンという、当世流行のなりはしていても、どこかにありありと残っている。

「飯沼！　君の囲い者じゃないか？」

藤井は額越(ひたいご)しに相手を見ると、にやりと酔(よ)った人の微笑を洩(も)らした。

「そうかも知れない。」

飯沼は冷然と受け流してから、もう一度和田をふり返った。

「誰だい、その友だちというのは？」

「若槻(わかつき)という実業家だが、——この中でも誰か知っていはしないか？　慶応(けいおう)か何か卒業してから、今じゃ自分の銀行へ出ている、年配も我々と同じくらいの男だ。色の白い、優しい目をした、短い髭(ひげ)を生やしている、——そうさな、まあ一言(いちごん)にいえば、風流愛すべき好男子だろう。」

「若槻峯太郎(わかつきみねたろう)、俳号(はいごう)は青蓋(せいがい)じゃないか？」

わたしは横合いから口を挟(はさ)んだ。その若槻という実業家とは、わたしもつい四五日前(まえ)、一しょに芝居を見ていたからである。

「そうだ。青蓋(せいがい)句集というのを出している、――あの男が小えんの檀那(だんな)なんだ。いや、二月(ふたつき)ほど前(まえ)までは檀那だったんだ。今じゃ全然手を切っているが、――」

「へえ、じゃあの若槻という人は、――」

「僕の中学時代の同窓なんだ。」

「これはいよいよ穏(おだや)かじゃない。」

藤井はまた陽気な声を出した。

「君は我々が知らない間(あいだ)に、その中学時代の同窓なるものと、花を折り柳に攀(よ)じ、――」

「莫迦(ばか)をいえ。僕があの女に会ったのは、大学病院へやって来た時に、若槻にもちょいと頼まれていたから、

便宜を図ってやっただけなんだ。蓄膿症（ちくのうしょう）か何かの手術だったが、――」

和田は老酒（ラオチュ）をぐいとやってから、妙に考え深い目つきになった。

「しかしあの女は面白いやつだ。」

「惚（ほ）れたかね？」

木村は静かにひやかした。

「それはあるいは惚れたかも知れない。あるいはまたちっとも惚れなかったかも知れない。が、そんな事よりも話したいのは、あの女と若槻との関係なんだ。――」

和田はこう前置きをしてから、いつにない雄弁（ゆうべん）を振い出した。

「僕は藤井の話した通り、この間（あいだ）偶然小えんに遇った。所が遇って話して見ると、小えんはもう二月ほど前に、若槻と別れたというじゃないか？　なぜ別れたと訊（き）いて見ても、返事らしい返事は何もしない。ただ寂しそうに笑いながら、もともとわたしはあの人のように、風流人（ふうりゅうじん）じゃないんですというんだ。

「僕もその時は立入っても訊（き）かず、夫（それ）なり別れてしまったんだが、つい昨日（きのう）、——昨日は午（ひる）過ぎは雨が降っていたろう。あの雨の最中（さいちゅう）に若槻（わかつき）から、飯を食いに

来ないかという手紙なんだ。ちょうど僕も暇だったし、早めに若槻の家へ行って見ると、先生は気の利いた六畳の書斎に、相不変悠々と読書をしている。僕はこの通り野蛮人だから、風流の何たるかは全然知らない。しかし若槻の書斎へはいると、芸術的とか何とかいうのは、こういう暮しだろうという気がするんだ。まず床の間にはいつ行っても、古い懸物が懸っている。花も始終絶やした事はない。書物も和書の本箱のほかに、洋書の書棚も並べてある。おまけに華奢な机の側には、三味線も時々は出してあるんだ。その上そこにいる若槻自身も、どこか当世の浮世絵じみた、通人らしいな

りをしている。昨日(きのう)も妙な着物を着ているから、それは何だねと訊(き)いて見ると、占城(チャンパ)［#ルビの「チャンパ」は底本では「チャンバ」］という物だと答えるじゃないか？　僕の友だち多しといえども、占城(チャンパ)なぞという着物を着ているものは、若槻を除いては一人もあるまい。――まずあの男の暮しぶりといえば、万事こういった調子なんだ。

「僕はその日膳(ひぜん)を前に、若槻と献酬(けんしゅう)を重ねながら、小えんとのいきさつを聞かされたんだ。小えんにはほかに男がある。それはまあ格別(かくべつ)驚かずとも好(よ)い。が、その相手は何かと思えば、浪花節語(なにわぶしかた)りの下(した)っ端(ぱ)なんだぞ

うだ。君たちもこんな話を聞いたら、小えんの愚を哂わずにはいられないだろう。僕も実際その時には、苦笑さえ出来ないくらいだった。
「君たちは勿論知らないが、小えんは若槻に三年この方、随分尽して貰っている。若槻は小えんの母親ばかりか、妹の面倒も見てやっていた。そのまた小えん自身にも、読み書きといわず芸事といわず、何でも好きな事を仕込ませていた。小えんは踊りも名を取っている。長唄も柳橋では指折りだそうだ。そのほか発句も出来るというし、千蔭流とかの仮名も上手だという。それも皆若槻のおかげなんだ。そういう消息を知って

いる僕は、君たちさえ笑止に思う以上、呆れ返らざるを得ないじゃないか？

「若槻は僕にこういうんだ。何、あの女と別れるくらいは、別に何とも思ってはいません。が、わたしは出来る限り、あの女の教育に尽して来ました。どうか何事にも理解の届いた、趣味の広い女に仕立ててやりたい、――そういう希望を持っていたのです。それだけに今度はがっかりしました。何も男を拵えるのなら、浪花節語りには限らないものを。あんなに芸事には身を入れていても、根性の卑しさは直らないかと思うと、実際苦々しい気がするのです。……」

「若槻はまたこうもいうんだ。あの女はこの半年ばかり、多少ヒステリックにもなっていたのでしょう。一時はほとんど毎日のように、今日限り三味線を持たないとかいっては、子供のように泣いていました。それがまたなぜだと訊ねて見ると、わたしはあの女を好いていない、遊芸を習わせるのもそのためだなぞと、妙な理窟をいい出すのです。そんな時はわたしが何といっても、耳にかける気色さえありません。ただもうわたしは薄情だと、そればかり口惜しそうに繰返すのです。もっとも発作さえすんでしまえば、いつも笑い話になるのですが、……………

「若槻はまたこうもいうんだ。何でも相手の浪花節語りは、始末に終えない乱暴者だそうです。前に馴染だった鳥屋の女中に、男か何か出来た時には、その女中と立ち廻りの喧嘩をした上、大怪我をさせたというじゃありませんか？　このほかにもまだあの男には、無理心中をしかけた事だの、師匠の娘と駈落ちをした事だの、いろいろ悪い噂も聞いています。そんな男に引懸かるというのは一体どういう量見なのでしょう。………

「僕は小えんの不しだらには、呆れ返らざるを得ないと云った。しかし若槻の話を聞いている内に、だんだ

ん僕を動かして来たのは、小えんに対する同情なんだ。なるほど若槻は檀那としては、当世稀に見る通人かも知れない。が、あの女と別れるくらいは、何でもありませんといっているじゃないか？　たといそれは辞令にしても、猛烈な執着はないに違いない。猛烈な、——たとえばその浪花節語りは、女の薄情を憎む余り、大怪我をさせたという事だろう。僕は小えんの身になって見れば、上品でも冷淡な若槻よりも、下品でも猛烈な浪花節語りに、打ち込むのが自然だと考えるんだ。小えんは諸芸を仕込ませるのも、若槻に愛のない証拠だといった。僕はこの言葉の中にも、ヒステリイ

ばかりを見ようとはしない。小えんはやはり若槻との間に、ギャップのある事を知っていたんだ。

「しかし僕も小えんのために、浪花節語りと出来た事を祝福しようとは思っていない。幸福になるか不幸になるか、それはどちらともいわれないだろう。——が、もし不幸になるとすれば、呪わるべきものは男じゃない。小えんをそこに至らしめた、通人若槻青蓋だと思う。若槻は——いや、当世の通人はいずれも個人として考えれば、愛すべき人間に相違あるまい。彼等は芭蕉を理解している。レオ・トルストイを理解している。池大雅を理解している。武者小路実篤を理解して

いる。カアル・マルクスを理解している。しかしそれが何になるんだ？　彼等は猛烈な恋愛を知らない。猛烈な創造の歓喜を知らない。猛烈な道徳的情熱を知らない。猛烈な、――およそこの地球を荘厳にすべき、猛烈な何物も知らずにいるんだ。そこに彼等の致命傷（ちめいしょう）もあれば、彼等の害毒も潜（ひそ）んでいると思う。害毒の一つは能動的に、他人をも通人に変らせてしまう。害毒の二つは反動的に、一層（いっそう）他人を俗にする事だ。小えんの如きはその例じゃないか？　昔から喉（のど）の渇（かわ）いているものは、泥水（どろみず）でも飲むときまっている。小えんも若槻に囲われていなければ、浪花節語りとは出来なかった

かも知れない。

「もしまた幸福になるとすれば、――いや、あるいは若槻の代りに、浪花節語りを得た事だけでも、幸福は確に幸福だろう。さっき藤井がいったじゃないか？我々は皆同じように、実生活の木馬に乗せられているから、時たま『幸福』にめぐり遇っても、摑まえない内にすれ違ってしまう。もし『幸福』を摑まえる気ならば、一思いに木馬を飛び下りるが好い。――いわば小えんも一思いに、実生活の木馬を飛び下りたんだ。この猛烈な歓喜や苦痛は、若槻如き通人の知る所じゃない。僕は人生の価値を思うと、百の若槻には唾を吐

いても、一の小えんを尊びたいんだ。

「君たちはそう思わないか？」

和田は酔眼を輝かせながら、声のない一座を見まわした。が、藤井はいつのまにか、円卓に首を垂らしたなり、気楽そうにぐっすり眠こんでいた。

（大正十一年六月）

底本：「芥川龍之介全集5」ちくま文庫、筑摩書房
　　１９８７（昭和62）年２月24日第１刷発行
　　１９９５（平成７）年４月10日第６刷発行
底本の親本：「筑摩全集類聚版芥川龍之介全集」筑摩書房
　　１９７１（昭和46）年３月〜１９７１（昭和46）年11月
入力：j.utiyama
校正：かとうかおり
１９９９年１月10日公開
２００４年３月８日修正